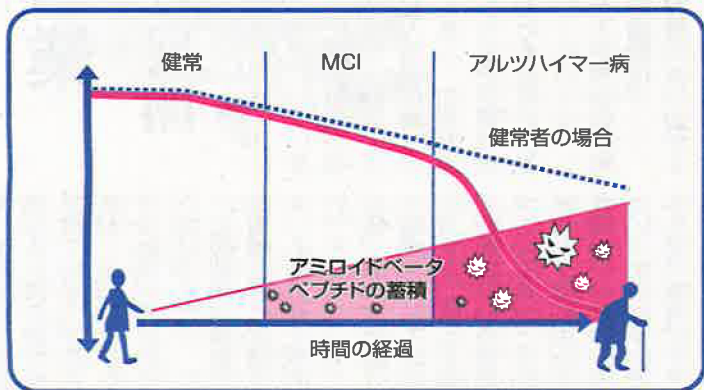


認知症を早期発見

血液検査でアルツハイマー診断

アルツハイマー病発症までの経緯



▲MCIは健康者と認知症の中間の段階を指す

MCBI(茨城県つくば市)は、軽度認知障害(MCI)の兆候を早期に発見できる検査法を開発。アルツハイマー病の原因物質であるアミロイ

ドβペプチドの蓄積を間接的に評価することでMCIのリスクを調べる。認知症のなかで最も多いアルツハイマー病は、アミロイドβペプチドが脳に蓄積し、神経細胞に障害を与えることが原因。同社が開発した「MCISクリーニング検査」は、アミロイドβペプチドに関連する血液中の特定のタンパク質(アポリポタンパク質・補体タンパク質・トランスサイレチン)を調べる。それらのタンパク質の血中量を測定することで、アミロイドβペプチドに対

する抵抗力をはかる。検査は1回10cc程度の採血のみ。「7割以上の高い感度がある」(業務執行役員・俵谷好法氏)という。

同検査だけでMCIの確定診断はできない。A(健常)、B(MCIのリスクは低め)、C(同リスクは中程度)、D(同リスクは高め)という判定結果で、「疑わしい」と判定された場合、専門の医療機関で2次検査を受けることになる。

同社は筑波大学発のバイオベンチャーとして設立。内田和彦社長は筑波大学准教授を兼務。筑波大の朝田隆教授らと共同でMCISクリーニング検査の研究結果をまとめた。「認知症は発症の20年ほど前から脳に変化があると言われる。できるだけ早期の検査が望まれる」(俵谷氏)。

現在、検査は全国100カ所の医療機関で対応。検査から3週間以内の結果が分かる。健康保険適用外で費用は2〜3万円ほど。1年以内に300カ所、数年内には1000カ所以上で検査を受けられるようにすることを目指している。